特集・横浜の国際性❺

行政の国際性

①一職員として国際性ということを考える
②開発途上国にみた国際的都市ナイロビ

①一職員として国際性ということを考える

佐々木寛志

一——はじめに
二——国際性ということで私が思い出す
ふたつの講演
三——市職員と国際性を結びつけようとする
説得力の乏しい議論
四——結ばれない結び

一——はじめに

友人によれば、私は観念的にものを考えるたちだというから、今回のような意味の定かでないテーマは、決して不得手ではないはずだ。しかし、観念的な人間が抽象的テーマで話を始めると、つまらない説教よりも退屈になる恐れがあるので、ここはひとつ、いとこの女子大生の助けを貸りることにした。彼女は学生でありながら、活字からものを学ばないという考えの持ち主で、それを立派に実践している。

「国際的ってどんなことだと思う」という私の質問に答えて、彼女のいわく「『国際的とは何か』って考えるとわからなくなっちゃうけど、『国際的な感じのする人』っていうんだったら、たとえば冒険家の植村さんとか、ファッション・デザイナーの三宅一生とか、指揮者の小沢征爾みたいな人。だから、日本だけじゃなくって外国を舞台にして活躍している人。その人の仕事が外国でも認められている人って感じね」。「なるほど。じゃあ、市役所の職員というのは、国際的って感じがする」と聞いたら、すかさず「ぜーんぜん！」というつれない答が返ってきた。我ながら愚問であったと恥じたが、こうなったら意地でも彼女に、市役所の職員も国際的でありうると納得させてみようという妙な考えを起こした。

以下は、映画「ドラキュラ都へ行く」を見るという彼女を、フルーツ・パーラーで好きなだけ食べさせるからとつきあわせ、甘い香りの漂う店内でえんえん二時間にわたって私がしゃべったことのあらましである。

二——国際性ということで私が思い出すふたつの講演

僕が学生時代に聞いた講演で、とくに感じるところがあったものがふたつある。ひとつは国際政治学者の坂本義和さんの話。もうひとつはフランス哲学者の森有正さんの話。いずれも一〇年あまりも昔のことなので、話を正確に再現することはできないが、当時僕なりに聞いたことを今ふり返って、僕の中に残っているものを話してみよう。

❶—平和と人権についての坂本さんの話

僕が大学に入ったのは、ベトナム戦争が激化したころで、この戦争に対する危惧が日本でも日増しに深まった時期だった。僕のような政治音痴ですら、国際社

会の平和ということに大いに関心をもった。

坂本さんは、国際的なレベルで平和を追求することの根拠は、とどのつまり人権の実現にあると説いた。すなわち、平和は人間が人間的に生きるために不可欠な条件であって、国際社会における平和は、国内社会での人権の擁護や実現ということに、その基本的な価値があるというのだ。

この話は、若い学生にはとても魅力的だった。僕たちの願う平和というものが、天のように遠い国際政治の舞台から急に身近になって、自分たちの実感できる現実の問題として感じられた。平和を作り出すことは、アメリカの大統領やソ連の書記長にしかできないことではなく、僕たちひとりひとりが、自分をとりまく状況のなかで、自由とか平等といった人間にとっての基本的な価値を追求していくことが、すなわち平和につながるんだ、という気がした。

余談だけど、これを今日の話題におきかえて角度を変えて言えば、ある国の軍隊が他のある国の国境を越えて、その国の主権と人びとの自由を奪っていることへの怒りは、国内で、あるいは自分の身の回りで、正義と自由を達成する努力に裏打ちされていなければならない、ということになるだろう。

❷—ジイドとモーリアックの親交についての森さんの話

話は変わるけど（と私が言ったところで、いつの間にかストロベリー・パフェを食べ終えた彼女は、当店オリジナルの〝レインボー・スペシャル〟なるものを注文した）、森さんの話は、自由、平等、平和というような言葉の根源的な意味についてであった。

森さんは、敬虔なカトリック教徒のモーリアックと無神論者のジイドが深い尊敬と友情で結ばれていたことを例に語った。神への信仰に生きる者と神を否定する者とでは、両者の信条は、その形の上では天と地ほどの違いがある。しかし、有限な人間がそれぞれ真実を求める道は、その極致において同じであって、互の真摯な生き方に対して共感と尊敬が生まれる。それは、互にアグノスチック（不可知）であることを認めたところでの、他者に対する尊敬である。

森さんは、「一人の人間にとっての経験の根本的独立性」ということを言った。自分のすること、言うことに本当の意味を与えることによって、「体験」がその人の中で深まり、その人のものでしかない「経験」として自己の内部に結晶し、それがその人を定義する。人間にとって、自由の基本的な意味はそこにあるというのだ。

僕自身はクリスチャンではないけど、ヨーロッパのキリスト教的知的伝統のなかで生まれた「自由」という概念の根本的な意味が、少しながらわかった気がした。いずれにしても、自由、民主主義、平和等といった理想が、他から与えられるもの、外側にあってそれをとり入れるものではなく、自分の経験から出発して、それらの言葉の内実が自分の内部に結晶していかなければならないと、自分なりに考えたのだった。

三——市職員と国際性を結びつけようとする説得力の乏しい議論

スプーンとフォークを巧みに操り、三種類のアイスクリーム、果物、生クリームを交互に口に運ぶ楽しげな彼女の顔を見て、私は「馬耳東風」という李白の言葉を思い浮かべた。ひょっとして私は、彼女にとっては、まったくナンセンスな話をしているのではないだろうか。しかし、私は、市職員の名誉と私自身の意地のために、ここで話を止めるわけにはいかない。

❶—国際性ということについての私の感想

長々と坂本さんと森さんの話をしたけれど、これは、外国を舞台に活躍してなくっても、国際性をもちうると言いたいためなのだ。自由とか平和という人間にとっての普遍的な価値を自分の行動原理としてもつ人は、その生き方において、国境を超えるものといえる。「普遍的な道理にしたがう精神」には、国際性があるというわけだ。

たとえば、ベトナムやアフガニスタンへ行かなくても、ひとりの日本人として自由と平和を求める生き方は、ベトナムの人やアフガニスタンの人たちの平和の願いに深いところでつながり、ベトナムの人やアフガニスタンの人からも、あるいは中国の人やフランスの人からも敬意が与えられるだろう。そしてまた、そういう生き方は、同じ生き方をしている人間に対し、社会制度や文化の違いを超えて敬意を払う。異質性の認識に立った信頼関係の基盤を自己の存在の内にもつこと、こういうことを、僕は国際性と言いたがっているのだ。

確かに僕の話には、国際性という言葉を、人間にとっての普遍性というものと結びつけようとするところにやや無理があるかもしれない。自分でもそこがいささか気になるけれども、一般的に日本人が、国際社会であまり理解されないことを思い出して欲しい。それは、日本人が本当の意味で自分が自分の行動の主人で

はない、あるいは自分自身の内にはっきりとした行動の原理をもたないと外国人に感じられるためなのではないか。一般に僕たち日本人には、基本的には上下関係だけど、相手と自分とがどういう位置関係にあるかをいつも頭のどこかに置いて、「自分」ではなく「相手との関係における自分」としてものを言ったり、行動したりする習慣があるように思われる。こういう仕方は、敬語という語法が国際的に特殊であることからもわかるように、外国人にとって理解に苦しむところではないだろうか。このことはいい悪いの問題ではないから、妙なコンプレックスをもったりするのは正しくない。そういうのは、その裏返しとして他を拒みつつ、自分は優れていると思い込む恐れがあると思う。ただ、日本人が外国人を理解し、相手にも理解されようとするとき、僕たち日本人のこういう特殊性を認識しておくのは大事なことだと思う。そしてその認識は、日本人として、人間にとっての普遍的な価値を求める精神から生まれてくると思われるのだ。

②—市職員の仕事と国際性ということについて

ここで、やっと本題にたどりついた。

市職員はいうまでもなく、市民のために仕事をする。また、市職員の仕事の目的は、基本的に市民の願いと同じものであるはずだ。しかし、だからといって、市職員と具体的なひとりの市民が、お互いに同じ立場で、同じ発想に立ってばかりいるわけではない。現実にはむしろ、極端な言い方をすれば、両者はお互いの違いを認識しなければ理解し合えない外国人同士の間柄みたいなところさえあるだろう。実際のところ、僕も役所の言葉づかいや仕事の流儀を習得する一方で、これはちょっと、役所とは縁の遠い友人や近所のおばさんには伝わりにくいだろうなと思うことがある。

たとえば、やっかいな事務手続きや全市的観点に立った規則、制度、計画などは、必ずしもひとりの市民の生活感覚や世間一般の常識感覚とふれあうわけではないだろう。市職員の側からすれば、それらの制度や計画は、市役所の仕事としての論理と仕組みの上に成り立っているものではある。しかし、市役所の外側からひとりの市民として見ると、その論理や仕組みは決してわかりやすいものではなさそうだし、また意外と市民には知られていないものだ。

そのようなところで、市民はどうも物わかりが悪いとか、得手勝手ばかり言うと嘆くのは決して正しい態度とはいえないだろう。これは、日本のことをよく知らないフランス人に、なぜお前は日本人のすることがわからないのか、と言うようなものだ。また市役所の中に入ってみなければ市役所のことはわからないというのでは、フランス人の理解を得ようとするときに、フランス人であることを止めて日本人になれというようなもので、無茶な話だ。

さて、市職員の仕事は、本来、市民から信託されたものとして、市民の理解と信頼をその基盤にもたなければならない。他者の理解と信頼を得るためには、人間にとっての普遍的な価値を求める営みのなかで、自分自身をみつめ、表現し、同時に相手を理解しようとするのでなければならないだろう。そこで僕たち市職員は、市役所の仕事のなかで、その本源的な目標の追求を行動の基準にすえる。そして、「普遍的な道理にしたがう精神」をもって、自分が自分の主人として仕事に励む。さらに、それが市民に理解されるように、自分の内部にその内実をもつ言葉で表現していく。こういうことが大切だと思う。

確かに、ひと口で市民といっても千差万別だから、その過程には当然、対立や葛藤も生じるだろう。しかし、そのようなところから、はじめて僕たちの内に、なれあいとは異なる市民との本当の意味での信頼と敬意を育てる基盤が形づくられていくのではないか。これは、僕がこの話の中で国際性と呼ぼうとしているところのものと、まさに同じ性質のものだろうと考えるのである。

これで僕の話はおしまいになる。もちろんこれは理想の話で、現実はこんな議論は青くさいと思わせるほどにディレンマに満ちており、ことはそう簡単ではない。しかし、理想ばかりを語るのは困りものだけど、現実に追従するばかりでは本質的なものを見失う。そこで僕は、来世の神の国の理想を語り、現世の日常生活における倫理を説く昔のキリスト教の預言者たちのように、理念と現実の緊張関係に主体的に身を置いて、謙虚に、誠実に仕事をしていくことが僕たちの任務なのだろうと思うのです。

四——結ばれないむすび

すっかり満腹して満ち足りた表情の彼女に、「ご感想は」とたずねたら、即座に「おいしかったぁ」という答が返ってきた。私はくじけずに「それで、僕の話の方は」と聞き直すと、「うーん。当り前みたいなことと抽象的なことをひとまとめにして話すから、わかったようなわかんないような感じ。だけど、職場で自由とか平等とかいちいち考えながら仕事をしてたのでは、何か、仕事にならない気がするけど」との返事。私が、「そう

いうことではなくて、毎日の自分の行動の基礎に、自由とか平等というようなことを基本的な原理としてもつという精神的態度なんだ」と言うと、しばし何かを思い出すような顔をして、彼女のいわく「あの、『じゃりン子チエ』っていう漫画に出てくる、ケンカとバクチが大好きで毎日遊んで暮しているテッっていうすごく愉快な男のセリフを教えてあげる。『おまえそういう本格的なこと考えとったら不幸になるど』って言うの」。（笑）「でも、身体に気をつけて頑張ってください」

最後のひと言でやや救われた感じがして、彼女と別れた私は、李白を気取り、ひとり、酒を飲みに行くことにした。

《参考文献》

坂本義和『核時代の国際政治』（昭和四十二年、岩波書店）

森有正『遥かなノートル・ダム』（昭和四十二年、筑摩書房）

森有正『木々は光を浴びて』（昭和四十七年、筑摩書房）

森有正『遠ざかるノートル・ダム』（昭和五十一年、筑摩書房）

高田博厚、森有正『ルオー』（昭和五十一年、筑摩書房）

安藤英治他訳『ウェーバー　宗教社会論集』（昭和四十三年、河出書房）

はるき悦巳『じゃりン子チエ　4』（昭和五十五年、双葉社）

〈総務局渉外部主査〉

②開発途上国にみた国際的都市ナイロビ

牧田修俊

一――政府機関に働く多くの外国人
二――首都ナイロビの様子
三――おわりに

横浜港に外国航路の豪華客船が停泊する時や、国際的な行事が催される時などの横浜は、国際的貿易港としての色彩が一層濃くなる。こうした時、はたして横浜はどのような国際都市なのか、考えさせられることがある。

私は、一九七八年九月から七ヵ月間にわたり、わが国の無償援助協力で実施されている水道建設のために、ケニア共和国水資源開発省の職員として派遣され、首都ナイロビに滞在していたものであるが、横浜の国際的な都市としての位置づけの判断の参考として、開発途上国にみた首都ナイロビの国際的様子について紹介したい。

御承知のとおり、ケニアは、国土の大部分がサバンナに覆われている。国民の多くは、厳しい自然条件のもとで、いまだ昔ながらのウシやヤギを追いながらの遊牧生活と、首都ナイロビに見られるような、新しい息吹きとともに、急速にヨーロッパ文化の影響を受け、近代的ビルが立ち並んだ都市の生活が奇妙に同居している国である。

こうした中で、英領から独立後一六年たった今日、内在するナショナリゼイションの意識のもとに、自力で建国の道を歩みつつ、農業国として積極的に農業生産の振興に力を入れている国である。

しかし、資源の乏しいことや、国家財政に恵まれない状況のもとに、都心部を一歩離れた地域では、文化的な生活から取り残されている部分が多い。

こうした状況におかれているケニアは、開発途上国として、農業、医療、教育、民生など経済社会の発展、福祉の向上を計るべきあらゆる分野にわたり、ヨーロッパを始めとする先進諸国から多くの財政的援助や、人的協力を受けている国である。